

田中館愛橘と占領初期の国字改革

茅 島 篤

Tanakadate-Aikitu and Japanese Orthography Reform
during the Early Stage of Occupied Japan

KAYASHIMA Atsushi

I. 序論

占領下の日本で、連合国軍総司令部民間情報教育局（以下、CI & E）のホール（R. K. Hall）ら、および米国対日教育使節団（以下、教育使節団または使節団）のストッダード（G. D. Stoddard）団長らとともに、わが国の国字ローマ字化への働きかけをした重要人物に、国内外のローマ字化の唱導者、田中館愛橘の存在があった。だが不思議なことに、戦前からのローマ字論者としての田中館の存在は世上十分認識されていながら、占領下の国字改革との関係で、彼に焦点を当てた研究と呼べるものは存在しない。

筆者は、研究の一環として国字改革研究に関する文献研究を行ってき、日米の重要な史料は大概発掘されたとみていた。日本語・英語以外の文献にも当たってみたが、現在のところ、日米に実在する一次史料を超える史料はみられない。ところが、筆者らは、田中館愛橘と占領下の国字改革に関する未見の裏付けとなる史料を田中館愛橘資料より発掘¹⁾した。

小論は、主にそれらの史料に依拠して、田中館と占領初期の抜本的な国字改革、ローマ字化との関わりの解明を試みる。小論では、以下、田中館愛橘とローマ字、彼とCI & Eおよび教育使節団との関わり、彼の教育使節団長への書簡と働きかけ、彼が教育使節団に渡した以外の外国語での論文等、の順で素描する。

II. 田中館愛橘とローマ字

周知のように、田中館は、重力、地磁気、飛行機、メートル法、地震、ローマ字といった分野で知られた地球物理学者である。ここではローマ字にウエイトをおいて田中館の来歴を一瞥する。

田中館は1885年、30歳のとき、『理學協會雑誌』第16号に、本雑誌をローマ字書きで発行

することを提案し、そのローマ字の用法について具体案を示した。それから数えて六十有余年、時局がどのようにに変遷しようと、彼のローマ字化への強い信念は変ることはなかった。

国内での田中館のローマ字化への活発な活動を示すものはいろいろとある。例えば、田中館らは、1909年に日本のローマ字社を設立、そして1921年には1914年設立の東京ローマ字会を改組して、日本ローマ字会を設立、彼は会長を長年務めた。1910年に*RÔMAZI SINBUN*を創刊(翌年から*RÔMAZI SEKAI*と改題)した。1930年には文部省臨時ローマ字調査会委員となった。彼はローマ字運動の父といわれ、暦によってみられる「ローマ字の日」は彼の命日にちなんでいる。また彼は学士院選出の貴族院議員として、1925年から貴族院が廃止された1947年までの22年間に、44回質問にたち、ローマ字(国語国字問題)に関して18回質問を行っている。²⁾ よって彼には「ローマ字博士」の異名がある。

国際的には、田中館は1898年から1935年までの38年の間に22回渡航し、国際会議や国際学会への出席は68回を数える。³⁾ 彼は、これらの渡航のとき、ローマ字化、ローマ字正字(書)法の問題に関して、国際連盟の知的協力委員会(田中館は本部委員)、国際言語学会、国際音声学会、国際地理学会それに国際新教育会議などで発表ないし発言をしている。また彼はアタチュルクの改革のもと、アラビア文字からローマ文字に改革したトルコ政府のローマ字委員などを訪ね、表記改革を調査した。彼のローマ字化は、日本語のみでなく世界の諸言語のローマ字化を意味していたのである。

田中館は、世界に向けてローマ字化をいち早く唱導した人物であった。彼の東京帝国大学での直弟子で、彼の米寿を記念した伝記執筆を直接指名された中村清二は、そのことに触れ、「(田中館は一筆者注)国際連盟の知的協力委員会の委員となることはローマ字論を同委員会に於いて論ずることを条件として承諾されたものである。」⁴⁾ と記している。

因に田中館と国際的な交流があった外国人学者には、彼の専攻に近いところでは、キュリー夫人(M. Curie, 化学・物理学)、ギョーム(C.E. Guillaum, 金属・物理学)、アインシュタイン(A. Einstein, 物理学)、レントゲン(W.K. Röntgen, 物理学)など、そしてローマ字関係では、イエスベルセン(O. Jespersen, 言語学)、ファンギルネケン(J. Van Ginnecken, 言語学)、トゥルベツコイ(N. Trubetzkoy, 音韻学)、ジョーンズ(D. Jones, 音声学)、パーマー(H.E. Palmer, 音声学)⁵⁾などがいた。英独への留学経験をもつ彼は、ヨーロッパの学者との交流が深かったことがわかる。

Ⅲ. 田中館愛橘とCI & E, 教育使節団

田中館が率いた日本ローマ字会は、占領直後から占領軍にローマ字化に向けて活動した。例えば、同会の重鎮で田中館ともっとも頻繁に連絡をとりあっていた佐伯功介は、占領開始後約3カ月目の1945年11月7日、まだホールが国語改革担当に任命される前(任命は同月12日)、総司令部宛に「漢字廃止・ローマ字採用」の書簡を送っていた。佐伯はその後の同月26

日、ホールの「私に命令でないが話したいから」との要請で彼と会談している。佐伯は、要請があった2日前の24日に、連絡係兼通訳のガントレット (J. O. Gauntlett) にローマ字の本少しと未完成の手紙を託している。⁶⁾

この時の会談でのホールの関心を、佐伯が田中館に同年11月29日付でだした原文ローマ字書きの書簡 (以下、二人の書簡はすべてローマ字書きである) にみてみよう。

綴り方のことはひとつもなく、会の人数、出版物、学位論文をローマ字で書いたものがあるか。ローマ字についての学位論文があるか。ローマ字で国民学校の講習をやってみた実験があるか。盲人 (加筆一筆者注) の学校は4年ですむというが (漢字仮名交じり文を使う国民学校より修了が2年早くの謂一筆者注)、どここの学校でやってみたか、その住所。大学・高等学校の試験の答案をローマ字で書いてもよいという法律がでたか。(おそらくこれは選挙のローマ字投票のことと思います) (ママ) 大学・高等学校で試験の答案をローマ字で書くことを許す先生の名前と住所、ローマ字講習の資料、このようなことでした。⁷⁾

ホールのこれらの質問に対する回答となるローマ字書きの機関紙、専門書、文学作品、聖書、学位論文等の文献情報は、彼が教育使節団来日 (1946年3月5日と6日) 直前の同月4日にまとめあげた「暫定的研究—日本語表記法改革の研究」⁸⁾ に記述されている。因に、選挙に関しては、大審院は1920年11月にローマ字投票を有効と判決、内務省は1923年4月にローマ字投票の有効を告示していた。

田中館のCI & Eと教育使節団との関わりを中心に、彼の貴族院手帖のローマ字日記を通じて、教育使節団来日前後の数ヶ月にみてみよう。

1945年12月17日から23日の週では、17日に「日本語表記とローマ字運動13部送る (英文論文—筆者注)」, 20日に「葛の根⁹⁾ 国際連盟知的協力院長の報告についての意見—ローマ字問題とローマ字書きの発展及び正字法の制定 (前者は田中館の演説, 後者は論文—何れも英語—筆者注) のこと」が書いてあり, 21日に「佐伯来る。パンフレットやる」, そして豫備欄に「ニューゼント (D.R.Nugent) 中佐 (CI & E教育課長—筆者注), ホール大尉」とある。翌46年1月1日から6日の週では, 1日に「午後, 秀三 (元田中館の娘婿, ローマ字論者, GHQ顧問—筆者注) とホール氏来る」, そして豫備欄に「ホール来る」とある。3月11日から17日の週では, 13日に「ストッダードに手紙書く」, 翌14日に「ストッダードと話した」とあり, その週の豫備欄には, 「ストッダードに論文3編やった。ジョージS. カウンツ (George S. Counts)」とある。ストッダードは, 教育使節団の団長であり, カウンツは同使節団の国語改革委員長であった。興味あるところでは, 3月25日から31日の週の豫備欄には, 「レーニンの言葉 “ラテン化 (ローマ字化の謂一筆者注) — それは東洋における大革命である” を読んだ」とある。¹⁰⁾

上記の如く, ホールは1946年正月元旦に田中館を自宅に訪ねローマ字化について懇談している。彼は田中館を高く評価した。

田中館は、逸早くCI & Eのホールと面談していた佐伯と連絡をとりあって、教育使節団の会談に臨んだのであった。

田中館は、「日本式綴り方のローマ字を日本の国字とする事」を目的とした日本ローマ字会長の資格で、ホールが使節団に「国語改革」について講義を行った1946年3月13日に、ストッダード教育使節団長に書簡を認め、彼の英文の3篇のローマ字に関する論文を入れ、翌14日の会談の準備をした。彼によると、同日「さつそく逢おうと言って、副団長格のCounts教授とともに親しく話合ってこの論文の要点を説明した。」という。¹¹⁾(因に、日本ローマ字会の重鎮であった鬼頭礼蔵も同月13日付で教育使節団宛にローマ字化を求める書簡を認めている。)

この会談は、教育使節団が「国字ローマ字採用」を討議する前、つまり3月20日前に行われた。会談の重要な一部分を彼の帝国議会での発言と自叙伝的著書にみてみよう。

「色々御尋ガアリマシタ、其ノ始メハ今國字ノ爲ニドレダケ時間ヲ費シ、ドレダケ苦勞シテ居ルカト云フコトニ對シマシテ、是モ色々統計モアリマスガ、先ヅ『ヨーロッパ』邊デ學ブ者ノ六分ノ一位シカ同ジ時間ニ學バナイノハ文字ノ爲ニサウナッテ居ルト云フ話ヲシマシタ (以下略)」¹²⁾

また「団長は：『どうです！ 国民がこれについて来ましょうか？』と言うから、『大丈夫ついて来ます。若い者のいきごみでたしかにかかります。年寄りはおてにしません！』と言ったら、『あなたは若い！』と言うから『90です』と言えば『信ぜられない』などと笑い話をしてわかれた。偶然にも、これが使節団で国字問題を議するまえの日であったそう。上の話が参考されたかどうかかわからないが、とにかく使節団の勧告は、『この機会をはずさず速やかに綴方を国語に合うように研究して、早く小学校へ入れるようになさい』(ママ)と言ったので、文部省はさつそく委員を設けて、いわゆる文部省式をきめて発表したことは、すでに知っている通りである。』¹³⁾

IV. 田中館愛橘の教育使節団長への書簡と働きかけ

先ず書簡¹⁴⁾ からみてみよう。

東京 1946年3月14日

連合国軍教育使節団長
ジョージ ストッダード 殿

拝啓

ご貴殿にはすでにご存知のことと存じますが、日本語表記のローマ字の採用は、日本国民が16世紀に西欧人と接触して以来、わが国の知識人のみならずそれに関わりあいのある外国人によって真剣に考慮されてきました。

この問題に対する認識の消長はありましたが、正字法確立の必要性は、近年における国際的

な意思疎通およびその技術応用の急速な進歩をともなった発展をみ、痛切に感じられるようになりました。

専門家と適当な権威者たちからなる特別委員会（文部省臨時ローマ字調査会—筆者注）は、社会的そして科学的、国内的そして国際的なさまざまな見地から協議いたし（1930—1936）、いわゆる日本式（ローマ字綴り字—筆者注）を標準正字法として公文書に採用する最終決定に達し、1937年、内閣訓令第3号として公布いたしました。

言語表記は教育における基本的要素の一つであることに鑑み、貴使節団はローマ字化のこの問題にしかるべき考慮をはられることと存じます。この千載一隅の機会に、ご高覧に供したく、ここに拙論を同封させていただきました。ご貴殿ないし貴使節団のどなたかこの事柄に関してさらなるご調査のご意志がございましたら、衷心より喜んで貴意に沿いたく存ずる次第であります。

敬具

田中館愛橘（署名）

日本ローマ字会長

田中館が同封したローマ字化に関する原著論文名等は次の通りである。

(1) Recommendation of Japanese Writing.

Presented to the Int. Cong. Pho. Sci. Amsterdam, July 1932.

(2) A Study of Japanese Phonemes by means of Tone Films.

Also, “Kuzu no Ne” pp.172-178.

(The Proceedings of 一筆者注) II nd Int. Cong. Pho. Sci. London, July 1935. Proc. pp. 117-122.

Also, “Kuzu no Ne” pp.172-178.

(3) Development of Rômazi Writing and Its Standardization.

Anniversary Volume for Prof. Van Ginneken. pp.357-361. Also, “Kuzu no Ne” pp. 207-211.

(Mélanges de linguistique et de Philologie offerts à Jacq. Van Ginneken à l’Occasion du Soixantième Anniversaire de sa Naissance (21-avril 1937), pp. 357-361 一筆者注)

追加した仏文での論文とジップ助教授（George E. Zepf）から田中館宛への書簡写し

(4) La Phonétique Japonaise au point de vue Phonologique et son Application a l’Orthographe Nationale.

Bull. de la Maison Franco-Japonaise, Tome 8 No.1 pp.1-32. 1936.

(Conférence faite à la Maison Franco-Japonaise le Mardi 28 Avril 1936 一筆者注)

Together with a copy of a letter from Ass. Prof. Zipf of the Harvard Univ.

次に、田中館が使節団長らに手渡した上記論文名等を翻訳しておく。

(1) 「日本語表記法のローマ字化」

これは1932年7月、オランダのアムステルダムで開催された第一回国際音声学会で発表のものである。

(2) 「トーキョー・フィルムの使用による日本語フォニームの研究」

これは1935年7月、イギリスのロンドンで開催された第二回国際音声学会会報に掲載されたものである。

(3) 「(日本における)ローマ字書きの発展及び正字法の制定」

これは1937年4月、オランダのジュネーブ大学ファンギルネケン教授の60歳の記念論文集への招待論文である。実際のタイトルには in Japan が入っている。

(4) 「音韻学上より見たる日本語の音声と正字法」

これは1936年4月28日、東京の日仏会館における講演で、同年の日仏会館学報に掲載されたものである。

書簡写しは、旧知のハーバード大学現代語学科ジップ助教授から田中館への1937年1月25日付のものである。その内容は、ジップ助教授が大変関心をもつ上記(4)の仏文の論文「音韻学上より見たる日本語の音声と正字法」を送ってもらったことへのお礼、そして「私が日本人ならきっと間違いなく(ヘボン式に対して一筆者注)日本式ローマ字綴り字を採用する」との彼の日本式への賛意を表明するものである。

ここで上記の田中館書簡について、少し説明を加えておく。

田中館の本書簡の宛名は連合国軍教育使節団長となっているが、これは同使節団を招聘したマッカーサー元帥が、米国ではなく、連合国軍の最高司令官として使節団を招聘したからだと推断される。

上記田中館の論文は、すべて彼が1930年代に発表したものである。彼が使節団長に直接手渡した論文は(1)から(3)までの英文の論文である。

田中館が、上記仏文の論文(4)とジップ助教授の書簡写しをカウンツを通じて、ストッダード使節団長への手渡しを依頼したのは春木猛である。団長はフランスのソルボンヌ大学留学経験があり、フランス語に堪能、カウンツもフランス語は多少解せたことは、田中館は、彼らとの接触を通じて知ったからであると思われる。春木は1946年3月26日にカウンツを探しあて、田中館から春木に送付されてきた上記2点を、カウンツから使節団長に手渡しを了解してもらっている。春木は田中館宛への葉書のなかで、「カウンツ教授(先日の人)」^(ママ)、や「先日の二人はストッダード団長にコロンビア大学教授 George S. Counts, Ph. D. で、団員中の最も有力者の一人にて、七、八年前小生自身コロンビア大学で会見したことのある方です。」¹⁵⁾と記している。彼が田中館の使節団長らとの会談に関係したか否かは不明である。

田中館書簡にあるローマ字の綴り字の決め方については、教育使節団も、国語改革勧告の6項目のなかの2項目(1項目は、「国字ローマ字」採用)に入れていたゆえ、そしてそれが

歴史的・学問的な背景をもつ論争課題でもあったゆえ、少し記しておこう。

周知のように、1945年9月3日、つまり降伏文書調印式の翌日、GHQ最高司令部指令第二号により、自治体の名称、駅や主要道路標識は「英語ヲ以テ掲ゲラルルコトヲ確保スルモノトス。名称ノ英語ヘノ転記ハ、修正「ヘボン」式ニ依ルベシ」と定められていた。

日本式綴り字を代表する田中館は、戦前から、海外の著名なフォニームの大家イエスベルセン、ジョーンズなどを日本式の支持者に取りつけていた。一方ヘボン式綴り字を主張するローマ字ひろめ会は、1933年6月岡倉由三郎、藤岡勝二、市河三喜などの協力を得、ヨーロッパ、アメリカの同僚学者宛にヘボン式支持を訴えていた。¹⁶⁾ 田中館が1946年9月(彼の書簡には皇紀2605年とある)に佐伯にだした書簡には、「東北学院のガーハード(Robert H. Gerhard)教授、ハーバード大学ジップ助教授、ニューヘーブン(コネティカット州—筆者注)のデンゼルカー(Denzel Carr 元エール大学)などは熱心な日本式論者であります。』¹⁷⁾、そして彼が1948年8月10日付で増田様宛にだした書簡には「(CI & Eの—筆者注)ハルパーン(A. Halpern)という方が音韻論の専門家で日本式を賛成しておられるということです。』¹⁸⁾と述べている。

CI & Eのホールと1945年11月26日に会談した佐伯は、田中館への書簡のなかで、「ホールも綴り方はどうでもよいと言っていました。』¹⁹⁾と述べ、そして同日に文部省の石山脩平教科書局第二編集課長からも「ローマ字の綴り方には干渉しない。日本側で自由にやれと言っている』²⁰⁾と伺っていると述べている。教育使節団の考えについては、田中館は、使節団長らと会談から約2ヶ月後の1946年5月23日付の佐伯宛への書簡のなかで、「教育使節団のストッダード教授とカウンツ教授に会って話した時のことを考えてみれば、“どうしても多数がついてくる方になる”というのがあの人達の意見らしゅうのです。』²¹⁾と述べている。

いわゆるヘボン式と日本式の綴り字上の相容れない対立は戦前から続いていた。佐伯は田中館宛に1945年10月15日付でだした書簡のなかで、「はたして(米国の—筆者注)ジャパノロジストが首を突っ込んでいるとすると、(これは日本のヘボン式論者と同じものと見てよろしいから)我々の運動は国家主義の色合いをもっているとマッカーサー司令部で考えている恐れもあります。』、「日本ローマ字会はナショナリズムではなくてレーショナリズムだということを理解させることが必要だと思います。』²²⁾と述べている。田中館は上記1946年5月23日付の書簡のなかで、「今は我々の最も力の入れがある時節だろうと思います。それにつけて、ヘボン式の人達はまだまだ古い考えにこだわっていて司令部とも手を取って動いているように見えます。今国家主義の者をすべての方面で押し出そうとつとめている最中、日本式という名前をつらまえて“あれは超国家主義だ”と言って日本式をやめさせようとするものがあります。』²³⁾と述べている。

V. 田中館愛橘が教育使節団に渡した以外の外国語での論文等

田中館の論文等の一部は、CI&Eのホールらか使節団に直接・間接的に渡っていると推断する。少なくとも彼にはこれらの背景があったということである。

田中館には、管見のかぎり、他に英文と仏文での論文がある。それらは(1)1919年ロンドンの日本協会で発表した英文「日本語表記とローマ字運動」(Japanese Writings and the Rômazi Movement. Transactions of the Japan Society of London, Vol. XVII, pp. 74-98, 1920)。これはロンドンの Eastern Press, Ltd. からも同一タイトルで1920年に出版されている。(2)パリの日仏協会で発表した仏文「日本の国語表記へのローマ字のすすめ」(Recommandation des Caractères Romains pour l'Écriture nationale du Japon. Bulletin de la Société Franco-Japonaise No. XLVI, Oct.-Dec. 1920) (3)パリのソルボンヌ大学で発表した英文「日本語表記へのローマ字導入の状況」(Circumstances of Introducing Roman Characters into Japanese Writing. Les Presses Universitaires de France 1927?)。これは田中館の依頼でエリーセフ (S.Elisséeff) の協力を得、国際連盟の機関誌にも1928年2月に掲載されている。²⁴⁾

田中館には、ローマ字に関して他にも1932年にフランスのニースで開催の第六回国際新教育会議で発表の論文(特定できていない — 筆者注)、国際連盟の知的協力委員会での1930年代に発表の提案書²⁵⁾、田中館宛がほとんどの日本ローマ字会のパンフレット「日本式ローマ字表記についての外国人権威の意見」(Opinions of Foreign Authorities on the Japanese System of Rômazi Writing) などがある。筆者は、これらの一部の論文等がアメリカの大学図書館等に所蔵されていることを確認した。

日本ローマ字会は、上記の国際新教育会議日本部展覧所にローマ字綴り字表などを出品し²⁶⁾、田中館はそこで発表した。田中館は「(同会議でも繰りかえしましたが)、いま西東の二つの民族が、二つの違った種類の文字、一方は音を表わすローマ字、他方は意味を表わす漢字を使っておることは互の理解に大きなさまたげになっております。』²⁷⁾とローマ字唱導の背景を述べている。その時の論文を旧知のロンドン大学の音声学教授ジョーンズに送っている。ジョーンズは、転写(表記とも)についての世界で最も重要な権威はベルリン大学のウエスターマン (D. Westermann) 教授であると記し、イエスバルセンも勿論であり、これら二人とジョーンズ自身で転写についてのすべて必要な情報は提供することができる、と述べ、そして田中館に「あなたは疑いなく、継続的にローマ字の採用を唱導することにおいて、世界にもっとも価値あることをなさっています。』²⁸⁾とエールを送っている。

VI. 結論と新たな課題

占領初期の抜本的な国字改革、ローマ字化との関係で、田中館愛橘は、戦前のとりわけ1920年代および1930年代の彼の国内外でのローマ字研究で得た知見、ローマ字化運動の成果を、

占領初期のCI & Eと教育使節団にしっかりと働きかけていたことが判明した。田中館は、彼に一目置き彼を高く評価していたホール（教育使節団招聘を計画した人物でもある）および彼と会談した教育使節団長らに、ローマ字化に向けた確信を与えた。

具体的には、田中館が教育使節団長ストッダード、同国語改革委員長カウンツに1946年3月14日に説明をした「日本語表記法のローマ字化」他計3編の英文の論文は、彼が国際音声学会で発表したものと著名な言語学者ファンギルネケン教授の記念論文集に請われて執筆したものであった。それらは、彼が1935年から1937年にかけて発表したもので、とりわけ音韻、音素正字法の観点から論じたものである。彼の仏文の論文「音韻学上より見たる日本語の音声と正字法」およびジップ助教授の日本式ローマ字支持の書簡写しは、彼から依頼を受けた春木猛が1946年3月26日にカウンツに会い、カウンツからストッダード団長に渡されている。後者の論文等が渡った時は既に、教育使節団での「国字ローマ字採用」勧告への方針も決まっていたゆえ、前者ほどのインパクトといえるものはなかったものと推察する。

田中館が直接に渡していないみてきた論文等の一部は、CI & Eのホールらか使節団に渡っていると推断する。少なくとも、彼が説明する上でそれらが活かされていることは言うを俟たない。

ところでローマ字綴り字の問題は、ホールらおよび教育使節団は、漢字全廃がゴールであったゆえ、日本側が認識していたような重要な問題として捉えていなかった。ホール、ストッダード団長らの言としてみたように、その決定は日本側に委ねるものであった。

田中館は米国人学者で日本式を支持する人々として、ハーバード大学のジップ助教授、元エール大学のカー、CI & Eのハルパーンなどを挙げていた。当時日本式、ヘボン式双方からCI & E、教育使節団に働きかけがあっていたが、この背景には戦前からの双方相容れぬ長い対立が存在した。例えば田中館は、世界を代表する国際音声学会会長ジョーンズ、言語学者イエスペルセンなどといった外国の碩学者を日本式ローマ字綴りの仲間に入れて（会員にする）、日本式の正しさを主張していた。国内では、田中館の1919年のロンドンでの発表に出席、それ以来旧知の文部省語学顧問のパーマー²⁹⁾、ガーハードらを取り込んでいた。

今回の田中館愛橘資料からの発掘史料には、みてきた事実としての新しい知見から先行研究に修正を求めるもの、そして次にみる究明すべき新たな課題が存在することが判明した。

例えば、未知の田中館とハーバード大学現代語学科ジップ助教授らとの関係、つまり同学科長のジョーンズ(H. M. Jones)は教育使節団の候補者にもなり、言語簡易化プロジェクトにも関わった。そして使節団国語改革委員であった英語学者のステイブンス(D. H. Stevens)は同学科とも同プロジェクトとも関係があったからである。また田中館とCI & Eのニューゼント課長、田中館とハルパーンの関りである。さらに佐伯が1945年11月29日付の田中館宛への書簡のなかで、ローマ字仲間の高倉テルの同月28日の言として「この間ダイク(K. R. Dyke CI & E 局長のこと — 筆者注)とは会って話したが近いうちにまた会ってローマ字のことを話そう」³⁰⁾と述べていること、文部省の石山教科書局第二編集課長の言として「中等学校のあ

るものをローマ字で書け、これはホールは急進的で命令するかも知れないと言っているが、その上役のダイクは命令はどうかかわからないが、話し合いでやろうと少しなだめ役だそうです」³¹⁾と述べていることなどである。と言うのは、高倉とダイクの関係は未知の事柄であり、ホールは先行研究では既に同年11月10日および同月21日にいわゆるローマ字化を「指令」したとなっていたからである。³²⁾

史料のなかには、田中館秀三、大塚明郎、杉浦庸壽（以上、佐伯、高倉同様日本ローマ字会員）、松宮一也などローマ字関係者が占領軍と係っていたことがわかった。佐伯は上記11月29日付の書簡のなかで、「(昨日高倉テルから一筆者注) まことに良いことを聞きました。それは松宮一也君がダイクの下にいるヘンダーソン (H.G.Henderson) とハーバード大学 (コロンビア大学の間違い一筆者注) の同窓でダイクのところで通訳をしているということです」³³⁾と記している。また佐伯の1945年9月25日付の田中館宛の書簡には、「統一ローマ字会ができればアメリカから資金をもらうことも大変有望になります。ロックフェラーに頼んでも出してくれるでしょうし、アメリカへ渡って講演をして回っても集まるでしょう。」³⁴⁾とある。これらも明らかにすべき事柄である。(因に、上記ステーブンスはロックフェラー財団の人文部門ディレクターであり、戦前極東における言語簡易化プログラムに資金援助を行っていた。) 本テーマで扱わなかったところは稿を改めて執筆したい。

註

- 1) 二戸市シビックセンター、田中館愛橋記念科学館内。平成12年12月29日付の岩手日報に「国字ローマ字化に情熱 田中館博士の書簡発見」と題して報道されている。
- 2) 「貴族院における質問演説の記録(4)」『田中館愛橋会会報』第24号、田中館愛橋会、二戸市シビックセンター内、平成11年2月1日、5頁。
- 3) 「田中館愛橋記念科学館」パンフレット、および中村清二「田中館愛橋先生を憶う」田中館愛橋資料616。
- 4) 中村清二『田中館先生』鳳文書林、昭和18年、復刻版、田中館愛橋会 昭和61年、219頁。
- 5) 平井昌夫『國語國字問題の歴史』昭森社、昭和24年、289頁にはこれ以外の学者のリストがある。
- 6) 佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡、田中館資料1395-7-46。
- 7) 同掲。
- 8) Robert K. Hall, A Tentative Study JAPANESE WRITTEN LANGUAGE REVISION STUDY. *Joseph C. Trainor Papers*, Box37, Reel 32, Hoover Institution, Stanford University.
- 9) 著書 *Kuzu no Ne* は、田中館愛橋の『葛の根』日本ローマ字社、昭和13年。本著は1937年に内閣訓令で綴り方が国定に決まった記念に、日本ローマ字会が、同会長であった田中館がそれまで書いてきたものから抜き出し編んだものである。本書は三編から構成されており、第一編漢字仮名交じり文、第二編ローマ字文、第三編英文・仏文である。ローマ字論については、外国語では、英文で3編、仏文で2編収録されている。
- 10) 田中館愛橋資料の「貴族院手帖」。説明のため一部加筆。
- 11) 田中館愛橋『TOKI WA UTURU』鳳文書林、255頁。本著は見開きで、左頁にローマ字文、そして右頁に漢字仮名交じり文、で構成されている。
- 12) 昭和21年6月22日第90回帝国議会貴族院。詳しくは、『帝国議会貴族院議事速録72』東京大學出版會、

昭和60年、23頁を参照されたい。

- 13) 上掲、田中館愛橘『TOKI WA UTURU』255頁。
- 14) Letter from A. Tanakadate to G. STODDARD Esqr. President of the Educational Commission of the SCAP. Tokyo, March 14th 1946. 田中館愛橘資料1319-6-188。
- 15) 春木猛から田中館愛橘宛の昭和21年3月27日付葉書、田中館愛橘資料5192-77-64。
- 16) “To Fellow-scholars in Europe and America :”, Romaji-Hiromekai, Tokyo, June 1933. 田中館愛橘資料2906-36-36。
- 17) 田中館愛橘から佐伯功介宛の2605年9月27日の書簡、田中館愛橘資料1389-7-40。因に、とくに1920-30年代にローマ字綴り字の論争があり、文部省は、1930年に臨時ローマ字調査会を設置し、同37年に訓令式が決定された。
- 18) 田中館愛橘から増田様宛の1948年8月10日付書簡、田中館愛橘資料135-6-104。
- 19) 上掲、佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡。
- 20) 上掲、佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡。
- 21) 田中館愛橘から佐伯功介宛の1946年5月23日付の書簡、田中館愛橘資料1302-6-171。
- 22) 佐伯功介から田中館宛の1945年10月15日付書簡、田中館愛橘資料1392-7。
- 23) 上掲、田中館愛橘から佐伯功介宛の1946年5月23日付の書簡。
- 24) Letter from J. Belime to Dr. Aikitsu Tanakadate. 21 Mar 1930. 田中館愛橘資料4428-62, 11-1。S.エリーセフから田中館先生宛の1927年11月7日付書簡（原文日本式ローマ字），同4520-63-73。
- 25) 拙著『国字ローマ字化の研究—占領下日本の国内的・国際的要因の研究—』風間書房，2000年，205-08頁。
- 26) *RÔMAZI SEKAI* 22 no Mk., 11Go, 日本のローマ字社，1932年，29頁。
- 27) 上掲、田中館愛橘『TOKI WA UTURU』165頁。
- 28) Letter from Daniel Jones to Mr. Tanakadate, 8th Sept, 1932. 田中館愛橘資料5389-86-30。
- 29) 上掲、田中館愛橘『TOKI WA UTURU』253頁，255頁。
- 30) 上掲、佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡。
- 31) 上掲、佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡。
- 32) 拙稿「ロバート・K・ホルのローマ字化『指令』説の検証」『アジア文化研究』第8号，国際アジア文化学会，2001年6月を参照されたい。
- 33) 上掲、佐伯功介から田中館先生宛の1945年11月29日付書簡。ローマ字関係者の確認については，2001年7月25日柴田武氏のご教示を賜った。
- 34) 佐伯功介から田中館先生宛の1946年9月25日付書簡，田中館愛橘資料1312-6-181。

（本学助教授）